

わたくしの大学院時代と許雄 Heo Ung ホ・ウン先生

権在一 Gweon Jaeil クォン・ジェイル (ソウル大学言語学科)

1975年春東崇洞 Dongsungdong トンスンドンの文理科大学〔文理学部〕からここ冠岳山 Gwanagsan クァナクサンの人文大学〔人文学部〕に引っ越した。その翌年碩士課程〔日本の修士課程〕に入学し、1978年碩士号を得、すぐ博士課程に入学し、1985年春博士号を得るまで、海軍将校として服務した3年半を除いて残りの期間を大学院で過ごしたことになる。

冠岳山時代の大学院は東崇洞時代の徒弟的な雰囲気とはまるで違った。言語学科の場合1年に1-2名が入学したのとは違ってわたくしの碩士課程入学の同期は実に4人にもなった。新しい大学の雰囲気と増えた学生数によってどの科目も学部のとくのように毎週授業が行われた。このような変化を受け入れられなかったある先生は以前のようにひまあるたびに研究室に呼び、お出しになっていた課題をテーマとしてあれやこれやのお話をなさってはまた課題をお出しになって指導なされた。

わたくしは学部時代は勿論だが大学院時代にもすばらしい先生に師事して勉強したことがもっとも意義深いことだった。わたくしの学問にはあの方たちの学問と学問の態度がそっくりしみ込んでいる。そこでこの文ではそのような先生方のうちわたくしの指導教授でいらっしゃった許雄先生を回顧しようと思う。

許雄先生はわが国を代表する言語学者、国語学者でいらっしゃった。許雄先生との最初の出会いは学部1年の言語学概論の講義であった。どんな理論でも先生のお言葉を通して出てくれば易しく正確だった。それで感激した。穏やかな声で縦横に整然と組み立てた先生の講義は言語学はこのように賢い学問なのだなあということをもどの時間にも確認することとなった。

先生は国語研究を言語学として昇華なさり、これを土台に国語を守り育てる実践運動を展開なされた方である。先生は国語を研究するための独創的理論を作り、実証的に国語の真の姿を明らかにした。また先生は国語運動を通じて国民の文字生活はハングルだけで、言語生活は易しく、正しく、きれいな言葉で行い、われわれの言語文字の価値を高めた。このような面で許雄先生は卓越した学問の業績を残した国語学者出あり、かつ民族文化と精神をひるまず守った国語運動の実践家であられた。

先生の学問研究の方法のもっとも大きな特徴は先行の研究を継承してこれを土台に独創的に発展させたことである。先生が継承したのは酷の内外のいろいろな理論と思想である。近くでは周時経*Ju Sigyeong チュ・シギョン先生と崔鉉培**Choe Hyeonbae チェ・ヒョンベ先生、われわれの先人たちに根を置き、国外

ではヨーロッパの機能=構造主義理論, アメリカの記述=構造主義理論, 変形生成文法理論をあまねく参照している. そのようにして先生は学問の深みを加えただけでなく, 言語理論から国語の記述に至るまで, 音声学から統辞論に至るまで, そしてこれを越えて国語政策に至るまで研究の幅を広げられた.

* 【注】(1876年12月22日-1914年7月27日) 12歳で漢陽 Hanyang ハニャン [現在のソウル] に上京, 李会鍾書堂でおよそ4年間漢文を学ぶ. 1893年培材学堂で数学, 万国地誌, 歴史, 英語などの新学文を学ぶ. 1895年独立協会に参加, 1896年4月7日から発行のハングルのみの新聞「独立新聞」の会計, 校補員 [編集局長], 1897年培材学堂万国地誌学科卒業, 1897年『国語文法』完成 (未出版), 1906年『大韓国語文法』, 1908年『国語文典音学』. 1907年朝鮮政府によって国文研究所が設立され, 研究員に抜擢される. 1908年国文研究会を発足させる (これが朝鮮語学会, ハングル学会の前身となる). 急病により39歳で死去.

** 【注】(1894年10月19日-1970年3月23日) 慶尚南道蔚山 Ulsan ウルサン生まれ. 京城高等普通学校卒業後周時経 Ju Sigyeong チュ・シギョンの朝鮮語講習院で研究, 1919年広島高等師範卒業, 1920年東萊 Dongrae トンネ高等普通学校教師, 1922年広島高等師範学校研究科入学, 京都帝大文学部哲学科卒業, 1925年までに京都帝大大学院教育学修士, 1926年延禧 Yeonheui ヨンヒ専門学校 (後の延世 Yeonse ヨンセ大学) 教授, 1933年朝鮮語正書法統一案の事業に参加, 1938年興業倶楽部事件の責任を取って辞任, 1941年10月朝鮮語学会事件で日本敗戦の1945年まで獄中にあった. 独立後米軍政庁編修局長, 国語教科書行政を担当, ハングル学会常務理事及び理事長, 1951年朝鮮戦争中避難地の釜山 Busan プサンで文教部編修局長, 1954年延世大学校教授, 同文科大学学長, 副総長, 1959年学術院副院長, 1959年延世大学校退任. 1962年大韓民国建国勲章.

わたくしが大学院に入学した頃, 先生は先生の立てた理論の枠に従って15世紀国語の形態論を集大成した「우리 옛말본 (朝鮮古語文法)」(1975年, 샘문화사 泉文化社) という大著を刊行なされた. それで自然にこの本の内容が大学院の講義のテーマになった. どの時間でも先生のお話を聞けば, ひよっとすると先生の理論のために言語資料が存在するものと錯覚するほどに言語現象を正確に見抜く理論を立てていらっしやう. わたくしが今まで勉強しているすべてのことはもっぱら先生の学問と学問の態度の恩恵を受けたものと言えよう.

その当時大学院の講義では先生方が新しい著書を執筆なさるとその内容を共に討論した. 金芳漢先生は『한국어의 계통 (朝鮮語の系統)』を執筆していらっ

しゃったが、その本に盛るべき内容を講義時間に提示してともに討論するようにし、アルタイ語学と歴史比較言語学をきちんと勉強することができた。許雄先生はほとんど同じ時期に『국어학 - 우리말의 오늘·어제 - (国語学-朝鮮語の現在・過去)]を執筆していらっしゃった。先生が提示なさる国語学の資料と理論をともに討論することはいつの時間でも楽しくもあり、かつ満足することでもあった。音韻変動の規則を新たに立て、その適用の順序を決めていくことはまるでパズルを解いていく喜びだった。

先生は学生個人をよくお世話してくださった。わたくしに対しても勿論である。碩士課程に入学すると同時に言語学科の教授会でわたくしを助教に選んだ。唯一賛成しなかった方は許雄先生でいらっしゃった。「君、研究するのに支障がなくはないかね？ もう一度考えて見なさい」。当時助教とは一人で教授の研究と学生の教育補助を基本として学科行政は勿論、学科関連のいくつかの学会の総務、編集の仕事、同窓会の幹事、甚だしくは先生方の個人の使い走りまでみんな引き受ける八方美人だった。いろいろの先生方の御意思に従って結局助教の仕事を引き受けることになったが、わたくしは先生が御心配なされないように眠る時間を削って勉強の時間を作った。

わたくしの碩士論文と博士論文の審査で先生と見解を異にしたある部分があった。国語の補助用言の構文の性格をどう見るべきかという問題である。次のような文をわたくしは記述の一貫性のためにすべて複合文構成と見ようと思った。しかし先生は本用言と補助用言の間が緊密に結ばれているからすべて単純文構成と見なければならぬとおっしゃった。

- (1) 나는 바다로 가고 싶다. Naneun badaro gago sipda. ナヌン・バダロ・カゴ・シプタ。わたくしは海に行きたい。
- (2) 나는 영희를 바다로 가게 하였다. Naneun Yeongheuireul badaro gage hayeossda. ナヌン・ヨンヒルル・バダロ・カゲ・ハヨッタ。わたくしはヨンヒを海に行かせた (=ヨンヒを海に行くようにした)。

しかし先生は碩士論文と博士論文でわたくしの見解を尊重して複合文構成と見る観点を選ぶようにしてくださった。その後わたくしは「형태론적 구성으로 인식되는 복합문 구성에 대하여 (形態論的構成と認識される複合文構成について) (1986년, “국어학” 제 15호, 국어학회 (1986年, 『国語学』第15号, 国語学会)) という論文で先生の意見に近寄る論理を広げたことがある。

「補助用言構成の中で上位文と下位文の主語が同じものと想定され、下位文に時制が実現されていない場合に、互いに隣り合っている成分、すなわち複合文の下位文と上位文の用言の間に緊密な統合関係が作られて形態論的構成と認識される」。

それから長い時間がたち、先生も次のようにわたくしの見解に近寄るように

補助用言公文の性格を叙述なさせた (1990 年, “20 세기 우리말의 형태론”에서 (1990 年, 『20 世紀朝鮮語の形態論』から)).

「補助用言は自立的な単語と扱われるから、統辞的構成と見ることができる。しかしそう見ると、本用言と補助用言を各々その文の述語と見なければならぬだろうし、従ってこの述語は各々他の主語を持っているように解釈しなければならないだろう。そうなれば、この文は複合文とならなければならない。これは無理である。このような解釈はわれわれの語感に合わず、その解釈は、これを単純文と見るよりも複雑である。それ故補助用言構成は、形式上は 2 つ以上の用言がつながっているが、これを一つの述語として処理する方が文法の説明に便利であると思われる。しかし「나는 그를 밥을 먹게 한다 Naneun geureul babeul meog'ge handa ナヌン・クルル・パブル・モッケ・ハンダわたくしは彼に飯を食わせる (=彼を飯を食うようにする)」の場合はどうにも複合文として記述しなければならないだろう」。

大学院時代、先生は学問において本当に厳格でいらっしゃったが、研究室の外ではとても気さくでいらっしゃった。学期が終われば終講パーティーを持った。先生は若い頃から歌とギターの演奏を楽しまれた。それで直接歌を歌ったりギター演奏をなさる時もあつただろうが、主にわれわれに順番を回して歌わせるのである。「単位は歌の上手な順に」というお言葉とともに、わたくしは「동무생각 Dongmu-saeng'gag トムムセンガク (思友 [友を思う])」で先鞭をつけ、アンコールには「섬마을선생님*Seom-maeul-seonsaengnim ソンマウルソンセンニム (島の先生)」で応えた。

*【注】李美子 Yi Mija イ・ミジャの代表的な歌。

終講パーティーでなくても時折先生はビアホールに連れて行ってくれたりなさる。敦岩洞 Donamdong トナムドン*の太極堂 Taegeugdang テグクタンの後ろ側あたりと記憶される所。そこに行けば英文科の先生、仏文科の先生等、みな一人で席を取っておられる。すると先生は他の席に別にお座りになるか、あるいはどなたかと一緒に席をお取りになる。

*【注】ソウル北方の城北区 Seongbug'gu ソンブックにある街。

ある時李基甲*Yi Gigab イ・ギガブ君と光化門**Gwanghwamun クァンファムンで金芳漢***Gim Banghan キム・バンハン先生と一緒に夕食を取った。焼酎をちょっと重ねたのだが、先生は吉音洞****Gileumdong キルムドンに行つてビールをもう一杯やろうと提案なされた。われわれは先生に従つて吉音洞のビアホールに行った。ところでドアを開けると、許雄先生が外にお出になるところだった。すでにビールをお飲みになつてお宅にお帰りのところだった。われわれ一行をご覧になると、許雄先生は嬉しそうに迎え入れ、一緒に酒盛りを始められた。お二人の先生のおそばで李基甲君と一緒に何時間過ごしたのか知らない。しば

らくたってやっと酒席を終え、わたくしと金芳漢先生は長位洞****Jangwidong
チャンウィドン方面にタクシーにお乗せし、許雄先生は歩いて吉音洞のお宅に
お送りした。

* 【注】ソウル大言語学科出身（1年後輩）。木浦 Mogpo モクポ大学国語国
文学科教授。韓国方言学会会長，韓国言語類型論学会会長歴任。

** 【注】ソウルの景福宮 Gyeongbok'gung キョンボックン（旧王宮）の正面
の門。

*** 【注】権在一，「穏やかなほほえみと温和なお心の金芳漢 Gim Banghan
キム（金）・バンハン先生」参照。ソウル大言語学科第4代主任教
授。

**** 【注】ソウル北方の城北区にある街。敦岩洞よりさらに北側。

***** 【注】ソウル北方の吉音洞よりさらに北にある街。

金芳漢先生はわたくしが博士論文を提出する時の指導教授でいらっしやった。
指導教授でいらっしやった許雄先生が定年退職なされたので，論文の提出をち
ょうど前にして指導教授が変更されたのである。結果的にわたくしはお二人に
指導教授として師事する光栄に浴した。

振り返ってみれば，わたくしの大学院時代は素晴らしい先生に師事して思う
存分勉強した幸福な時期だった。社会的にはたとい転換期の困難な時期であっ
ても，研究室の中においてだけは喜びと幸福を享受することができた時期だっ
た。みな先生方のおかげである。

わたくしは今やあの時の先生方と似たような年齢と位置に立っている。わたく
しは果たして学問的に，そして人間的に学生たちをよく教えているだろうか
と尋ねたりする。そうしてすぐ答える。わたくしを教えてくださった先生方の恩
に報いることはより誠実に勉強して学生たちをよく教えることであろう。これ
はさらにひいてはわれわれの学問が生きる道でもあるのである。優秀な人材た
ちがみな外国の大学に抜け出てしまい，われわれの大学院が空っぽになるなら
ば，われわれの大学院が存立出来ないであろうし，そうするとわれわれの学問も
持ちこたえられないであろう。したがって先生方が授けてくださった御恩に報
いることはまさにわれわれの大学院とわれわれの学問を生かす道と信じ，研究
と教育に最善を尽くそうと誓うのである。

（菅野裕臣訳）

（나의 대학원 시절과 허웅 선생님, 나의 대학원 시절 - 동창으로 본 서울대
지성사, 서울대학교대학원동창회, 2012.9.18. 74-78 면. わたくしの大学院時代と
許雄先生, 『わたくしの大学院時代一同窓生として見たソウル大知性史』, ソウル
大学大学院同窓会, 2012.9.18. 74-78 ページ).